

四天王寺のESD・教材開発調査概要報告

◇実施日 平成29年4月23日（日）

◇場所 四天王寺：大阪市天王寺区四天王寺一丁目11番18号

◇目的

昨年度、奈良国立博物館と連携し、忍性について、奈良市内の4つの小学校教員と合同で、教材開発及び授業実践を行った。忍性は、ハンセン病患者の救済に生涯をささげた鎌倉時代の律僧である。昨年度、忍性の事績を調べていくと、四天王寺の西門である石の鳥居を建立したのも認証であることがわかり、さらなる調査及び授業において学生に提示できる写真を撮影することを目的に教材開発調査を行った。

◇内容

（1）四天王寺について

- ・約1400年前に聖徳太子によって建立された日本最初の官寺である。その伽藍配置は、「四天王寺式」と呼ばれるもので、伽藍の中心に五重塔を配している。ブッダの死後、火葬された遺骨は8つの国に持ち帰られ、それぞれの地域で祀られた。舎利信仰の始まりである。舎利のある場所が遠くからもわかるように、また遠くからも拝むことができるように、埋葬地が高くされていったのがストゥーパであり、それが日本に伝わって木造の塔になったといわれている。つまり、塔は「舎利容器」であり、寺院の中心であるべきものである。四天王寺は塔を中心とした伽藍配置が残されている貴重な例である（国際交流、伝統文化）。
- ・ブッダが亡くなり、年月が流れるにつれて、ブッダのことが分からなくなることから、ストゥーパの周囲で参拝者を対象として、ブッダの事績を絵解きするようになり、それが壁画に描かれ、さらには仏像になったと考えられている。（キリスト教の教会にもキリストの一生を描いたフレスコ画をよく目にする）
- ・四天王寺は度重なる戦禍天災のため、幾度となく再建されてきたが、昭和20年3月14日の大阪大空襲でその大半が焼失した（平和教材）。しかし、西門の石の鳥居は戦火を免れている。

（2）石の鳥居について

- ・石の鳥居は、創建時の木造の鳥居を1294年に忍性上人が石造に改めたものであり、昭和9年に国の重要文化財に指定されている。
- ・鳥居の中央に「釈迦如来転法輪処当極楽土東門中心」という扁額が掲げられており、四天王寺の西門であると同時に、極楽浄土の東の入り口という認識があったことをうかがうことができる。



門であると同時に、極楽浄土の東の入り口という認識があったことをうかがうことができる。

・鎌倉時代にはハンセン病は、前世の罪悪などによって感染する「業の病」とされ、最も忌み嫌われ、恐れられた病であった。ハンセン病は当時は不治の病であり、ハンセン病患者が死後の救済を願って、極楽浄土の入り口である石の鳥居に集っていたことをうかがうことができる。